編集後記

●2001年のお盆休みは、サンフランシスコからロサンゼルスまでのウィンド・ファームを追いかけたドライブだった。広大な丘陵地帯にずらっと並ぶ真っ白い風力発電機が、風まかせに回っている姿は実に壮観であった。自然と人工物の融合。見方によっては超ミスマッチかもしれない。でも、見渡す限り巨大な風車がそびえたっているまん中にたたずんだ時、心が癒されるのを感じた。ゆっくりと動く物体と耳に聞こえる音の微妙な調和が、人間の五感に心地よさを与えているのだ…と思った。21世紀に入り、不況、リストラ、テロ…など、暗い話題が目に付く。新しい風が吹いて、暗い世の中を吹き飛ばしてくれればどんなにすっきりすることだろう。しかし、風を吹くのを待っているだけでは何も変わらない。心地よい新しい風を皆様に感じていただけますよう、これからも編集を通じてがんばっていきたい。（野村有子）

●私の勤め先でも今年コンピューターのオーダーリングシステムが導入されます。コンピューターは入力に時間と労力がかかるため、今は会計段階で入力している事務員を各科に配置して入力させてはどうかと提案したのですが、賛同者なしでした。陰では医者の仕事が増えると皆こぼしているのですが。事務員でできることを、人件費の一番高い医者がやるのでは、病院としては損です。ところで、パソコンだと能率良く文章が書けると自慢している先生の筆（パソコン？）が遅いのは、なぜでしょう。（木花　光）

●昨日、平塚市皮膚科医会が開催され、ピーリングの講演と、実技見学に出席した。地方会より、はるかに臨床医にとって役に立つ企画であった。時代とともに学会も変わってゆくべきであると痛感する一方、個人としてはそう思っても、それが実際にはなかなか実現しない所が今の日本の危機の本質的な原因かと考えた。（林　正幸）

●「神皮」第９号ができあがりました。今号から病院の自己紹介を書いていただくシリーズが始まりました。皮膚科の病診連携は今までもうまくいっていると思いますが、病院の特色を書いていただくことで、ますます紹介先を理解して、患者さんをお送りできると思います。私事ですが、もともと手術は好きでしたが、最近細かい物が若干見づらくなり、お願いする事も増えてきました。「年」とともに診療スタイルも変わっていくのだと実感したわけです。とにかく診療も広報もＩＴも楽しみながらやっていきたいと思っています。（浅井俊弥）

●会員の中にはご病気やけがの方がいらっしゃいますが、本人、家族、周りの方々はさぞ心配していることと思います。人は免疫系を駆使して、病原体、新生物を排除する精巧なメカニズムを備えていますが、それでも病気になってしまうわけで、よくよく考えてみると自分が今こうして健康（と信じている？）でいられることはとてもありがたいことだと痛感しました。そのことに感謝して乾杯、の毎日。アルコール性肝障害に気をつけなくては。（川口博史〈厄年〉）

●取り柄は健康と体力ですと自負していただけに、１年半の間に４回も手術を受けるとは思いもしませんでした。ただ昨今の技術の進歩のお蔭でその度に蘇ってしまうので、果して病気だったのだろうかと自分でも半信半疑になる程です。教訓は健康を過信しないこと、普段からチェックを、おかしいと感じたら忙しいからと言わずに医者にかかること、つまり、これらはいつも患者さんに言っていることだったのですけれど――。（塩谷千賀子）

神　皮〈第９号〉

2002年３月３日発行
発　行　神奈川県皮膚科医会
発行人　原　紀道
〒248-0007　鎌倉市大町1-18-15
電話　0467-22-3858

制　作　かまくら春秋社

表紙のことば●

昨年３月にチェコのプラハに行った時の写真です。今年も友人でグラフィックデザイナーの丸尾奈美さんに加工するのを手伝ってもらいました。

プラハ旧市街地の旧市庁舎の塔の上から中心広場を見下ろしたところです。町の人や観光客が、時報に動く塔の時計じかけを見に集まっているところを上から撮りました。（花岡さくら）

協力：丸尾奈美

Photo Essay

スイス

2001年　夏

インターラーケンからミューレンへ登る登山電車の途中駅で。
右端から、ユングフラウ、メンヒ、アイガーと、
スイスアルプスの有名な三山が連なる。

カペル橋、ルツェルン。
中世の面影を残す古都ルツェルン。
ヨーロッパ最古の木造の橋で途中に八角形の屋根をのせた水の塔がある。
旧市街には、対峙するピラトス山（別名、魔の山）に対して、
立派な教会があり、パイプオルガンの演奏が聴けた。

撮影・文／日下部芳志